中村俊定文庫
文庫 18
768

甲斐東
菱山村

老松正月序

笠置林巧うきうもかすをり新地
上品の宗匠也新郡下の花とふ
知る至るさて花の彩をうきうの梅
北東樹の木まもりあいて巨松
彩雲のをうきうもうるうて老松
何ぞ雄新村とふる古新をふう

往来なみの作と一豊髪無子
数くすれ乃紙は墨と臥て
さらにも深字てら千りん筆
三輪ても深月の冒於ゐ尻く
しうも知らて鈴は八千の野隣
事もやは牛耕を結ら引
めては刈まは麦ま取立て
冬を宮柳子梓柄とち書

むまれ乃地は名をけ花をおこし
さ秋はらふ山路の雪めうちに
そもり稲作を市にゆきまへて
筆を我のもちて陽く水の移
八は荷茶をるめ於て取紀とめ
古うちお秋の字にのきの嵩
むら路の懐てみえて花の外
京の人は性とは事あらとなく

しかれは先にかるはいさよあさかの
おもふに李延をはしらん中
和歌なとよりも撰集はさまさま
あをしの人のよみをきめあつめ
神あらは翁を仕る綱ひの
中にも此年月をへて其外
正月之神に奉りしと申ならく
なかれさのかゝまちもしれ

わりあさらあ姉に錦の袍に
あをやてたは此ゆらし此見せい
[illegible]中川らを此かのてふの神見
て草木も花ゆくさきにを
よこしの人も作るあきた
為尾之翁鈍す加武伝
時にを村北野を野路に
さらに遊びけ筆史[illegible]平

あるく杖のあとさへしたふ
ゆる隣の琴のつまにさへ
数寄のよる世の人の妻女どもの
あるしもあるとて
ゆるゝ木立のゆゑにこえの色みえ
まつ日て見つをきふ はらふ
一派横なきて只留主は咲也
とおくありもの岩は咲てる秋

にこゆる
宗祇さへ兎や麦秋
とりし賀茂まつり

壬申五月

蓮望兆

歌仙　半杯

秋の山　雄村
あつけなく八百とせ
ちいさい松の月もさびし　巣兆
ゆうぐれ雲を袖ばかり拭て　素兩
ぬけがらの蟬を踏ける　四　樓里

紅葉ちる酒をすゝめ　白川
夏籠ゆゑ山ゆ[illegible]ふる　素流
北窓に竹よりもあるる　梅里
野の狐ものぞかぬ　文鳥
瘤ぶとの太鼓[illegible]　白圭
[illegible]　柯
[illegible]　里
[illegible]　兩

[illegible] 北
[illegible] 川
[illegible] 流
[illegible] 雲
[illegible] 裡
[illegible] 主

媒杓老人著述同郡玉明山主

五

[illegible] 秋
[illegible] 秋
[illegible]

おもふらむおもふらむ此山の桜花
を死花と人の言ふなるまでに
春ごとに咲くらむ年の限りを
知らむ

春雨老屋撰

凡例

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鄙ぶり二章

あるじ

主じぶんん

西行 對交

宣家

文庫

於

[illegible] 蕉

[illegible] 白川

[illegible] 春湖

八

[illegible] 可堂

[illegible] 寥松

[illegible] 白圭

て

[illegible] 吟路

ら

[illegible] 蘇市

[illegible] 谷東

杉長

の

穂積

三巴

九 岡村

売子やちり法実ふ角大師　子賢

籠出つ柳くゞつ里も見　可紀

水絹やぬり見ゝる出板の下　由阪

雁も雪ふくまでも春かすみ堂　志竟

摺小衣はなもよし湯もや花瓶　茶源

洲の下や知多ふ二見ヘ了ゞ月蔵やも　斗月

び

岸まそや有明耕すむ山の月　北濱

十

紫のひかるおもねや長き日かな　子兮

路もかすみ春の中ゆくちる瀬を　路柳

笠冬の名もなき其めぐる花の陰　成美

う゛

雁鴨も雪の消てり春の雪　史山

ふ

猫の恋も垣ゆかりも梅の花　平角

蛙ふ二も浅く降もる月の中　是卷

[illegible]

り

[illegible]の[illegible]の[illegible]

た

[illegible]山　雄尾

[illegible]　[illegible]二

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

十一

[illegible]

結[illegible]

と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はるかぜに水ぬるみ初めし　ふり
梅ノ花を初てうぐいす　乗加
梅ノ花鶯なきもしる春　手新
西尾の梅正月まとにさくる　蒼虎
さそはるゝみなとにて　梅林

一ツ大中

いつもの梅ゝ　平松　志宮
一ぜんさくらぬ梅の後　一茶

十二

ま

新春のまつのうつくしき　古紫

百

百姓ぶりの梅ノ根　南泉
百両の松ぞ春の月　素迪

は

中郭ノ梅ノ花　寒梅　淋山
梅ノ花　水觀

[illegible] 堂堂

春の[illegible]て[illegible]ふり　仙松

[illegible]の[illegible]ふ[illegible]の[illegible]　辰仙

[illegible]ぬ[illegible]ふ[illegible]　南都　楚山

はる[illegible]る[illegible]　兄直

[illegible]　文水

[illegible]　一知

[illegible]　[illegible]井

十二

春風[illegible]て迎[illegible]　梅光

初[illegible]　允昔

[illegible]　[illegible]

[illegible]　本海

ち

ちよ[illegible]川[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　有圭

や

山吹の花よ孫抱くむらくも　古士朗

花ま待りく道の水の音　一トト

山伏の足とゝりや秋さてん　二三

歩くと二市いまゝん雲やも　山雪

義とゝ花も抱るの多ゝ　有二

やゝ雲ら花吹めるゝ雲ゝ　素藻

花いやゝ山と海ゝ雲ゝ　古周

ゝ

山雨や雲ゝ形ゝ雲ゝ　平秋

つ

月ゝ形ゝ雲ゝ雲ゝ星ゝ　雪馬

住ゝ雲ゝ雲ゝ三ゝ近ゝ用ゝ　仙李

月ゝ自ゝ住ゝ雲ゝ　北雨　一雨

雑ゝ雲ゝ中ゝ月ゝ雲ゝ　乗馬

ありゝ

大根ゝ雲ゝ形ゝ相ゝ　省我

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

飯ふていさう十月の頃花子　至也
同　菊花　所生　西金　袁丁
う。
かつらとて花樹子　巳陵
よ
赤菊の元雲ふく樹　文部
毎年菊を愛でる　都笑
殺てら海棠つゝ沙平　橘之
十六

紀
あれ〳〵秋の時樹　家部
名月や初秋の雲　岳格
とり
ゆ月や雲や鶴　花弦
て。指子
寺所や甘菊　法の月　月湖
ゆ雲や雲　女　葉陳

うめ

梅さくや古き文見る宮の先　画牛

梅さきて吹なり立る梅の宮　市杖

ふ

名をきいて今や強いの名残り　春隆

明れやすくてやすくて惜るなり　斗水

古

郭公待ひとや降る雨の中　和井

果はさい蛇のまてとする二月れ　三果

さくらの下路迄ゆく雨踏の尾しゃ　路白

夢さめい猫まつ月ゆれ　太節

有ふとやもとる尾のほ　義し

ど

何なきて蛙のなるを強の所　久路

で

出さる神に祈るなきて梅の花　橋堂

すゞ

菅刈や親子うち入月の寺　東来

さて

[illegible]

[illegible]

[illegible]　春樹

[illegible]

[illegible]　中金(?)

ぢ(?)

[illegible]　兎林

ど(?)

ヤイト又廿

拍子

餘興

松ぞやどても嶺の紀輪之
稲葉の引ちらす水室の郎　伊佐
松ばらを分て行の鈴　麦雨
眷属(四ツ)ばかり秋の風　古百明
こまちらさぬ手綱の長く撥くり　出屯
馬うつす童(二人)迷るもあるふ　月窓
湖を渡るやあの稲のうれ　園孝
十九

夕ぞ秋を安んずの松蕈　梅保
の春やあのう新ぐる三年の水　蕉隙
外市(二)場雪ふる仲ぐ書　胡隙
軍ふる時や出てまる場ふ夏　乗有
絶張ふ山も夏こしや川白　梅寿
秋の隙ふ式りのぬ白ぬ　は雪
名ぞ純ばふ式月の出ふ　叙来
湖ふ三雑投ふ夏の梅　庭石

鶯の声や梅の色　斗囊
きくにも我い花ひらく月　里丸
あるべきものを世の歌ひ　竹果
春はさくらの食さるる折り　宗拙
鶯の啼や梅の花の咲　かく
咲とみやさくらひらひらと　蕉雨
啼ぬやさ夢の松の色　吳生
さくらやあの中まてれ花ぬ　岱車
二十

ものいふ鶯の鶯の色　四賀
吉野やふりとまつ鶯さそふ　春華
冷し瓜走井いよ沢ものとまる　麦義
湖の春はのの花をけみをる　乙二
頬白啼春雨新をやはをら　田多
はとをよ春ものより峯の本の時　坂水
男ものう菖蒲の源の水　吉房
郭公初の鳴のひとこゑ　清宕

吹ふ嵐て九ふ[illegible]の月 漫々

[illegible] 柳翠

文化九年壬申初秋

八十翁媒柯著

省我校

東都

中村園枝寿枝

甲斐東 武井佐渡守 菱山村

中村園枝文庫